

季節のことば

～「季節のことば36選」と「二十四節気ひとこと解説」～

一般財団法人 日本気象協会

はじめに

平成 25 年の春、一般財団法人 日本気象協会では、現代の季節感に合う「季節のことば 36 選」を発表しました。

「季節のことば 36 選」までの道のりは長いものでした。

「“日本版二十四節氣”なるものを考えてみては？」と世に問い合わせてから約 2 年間、試行錯誤を重ねました。企画への反対意見も根強くありました。

最終的には“あなたが感じる季節のことば”を一般から広く募集して、選考委員会を経て「季節のことば 36 選」が選ばれました。

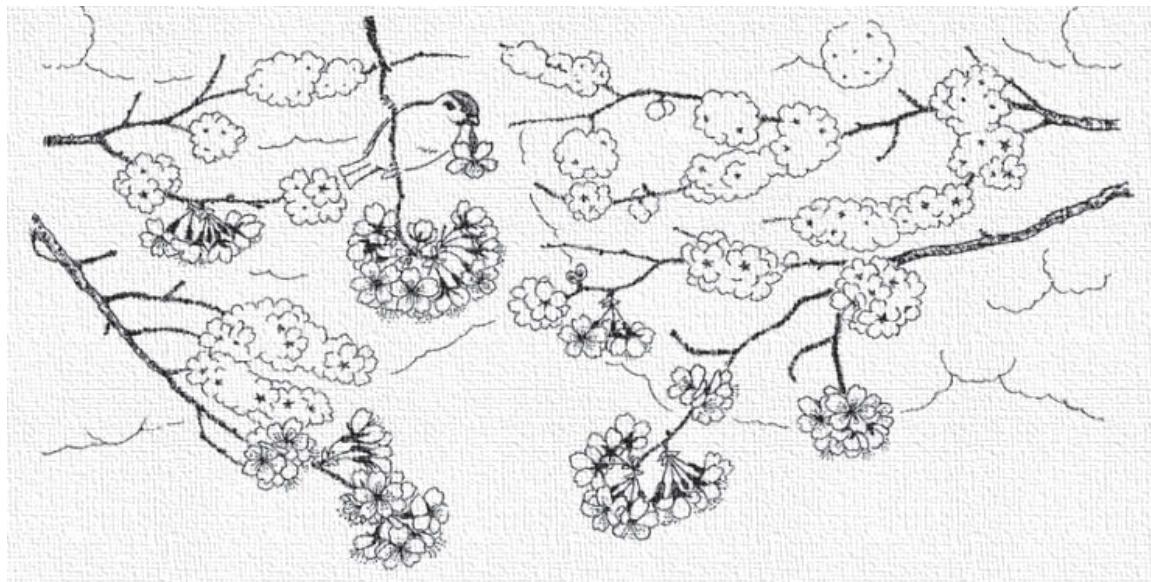
また、選考委員会では「二十四節氣ひとこと解説」も作成しました。文学史上もっとも短い解説で「二十四節氣に親しんでもらえるように」という気持ちが込められています。

この報告書は、「季節のことば 36 選」の発表に至るまでの取組みをまとめたものです。内部事情もかなり詳細に説明していますが、どのような議論、経緯があって最終的にこのような形になったのかを知っていただくために踏み込んだ解説をしました。選考委員会の先生方には大変お世話になりました。ありがとうございます。

資料編には日本の暦や季節のことばをテーマに開催したシンポジウムや公開イベントの内容も収録しています。

本書を通じて、もう一度いっしょに「季節のことば」について振り返っていただけたら幸いです。

平成 26 年 5 月吉日



季節のことば

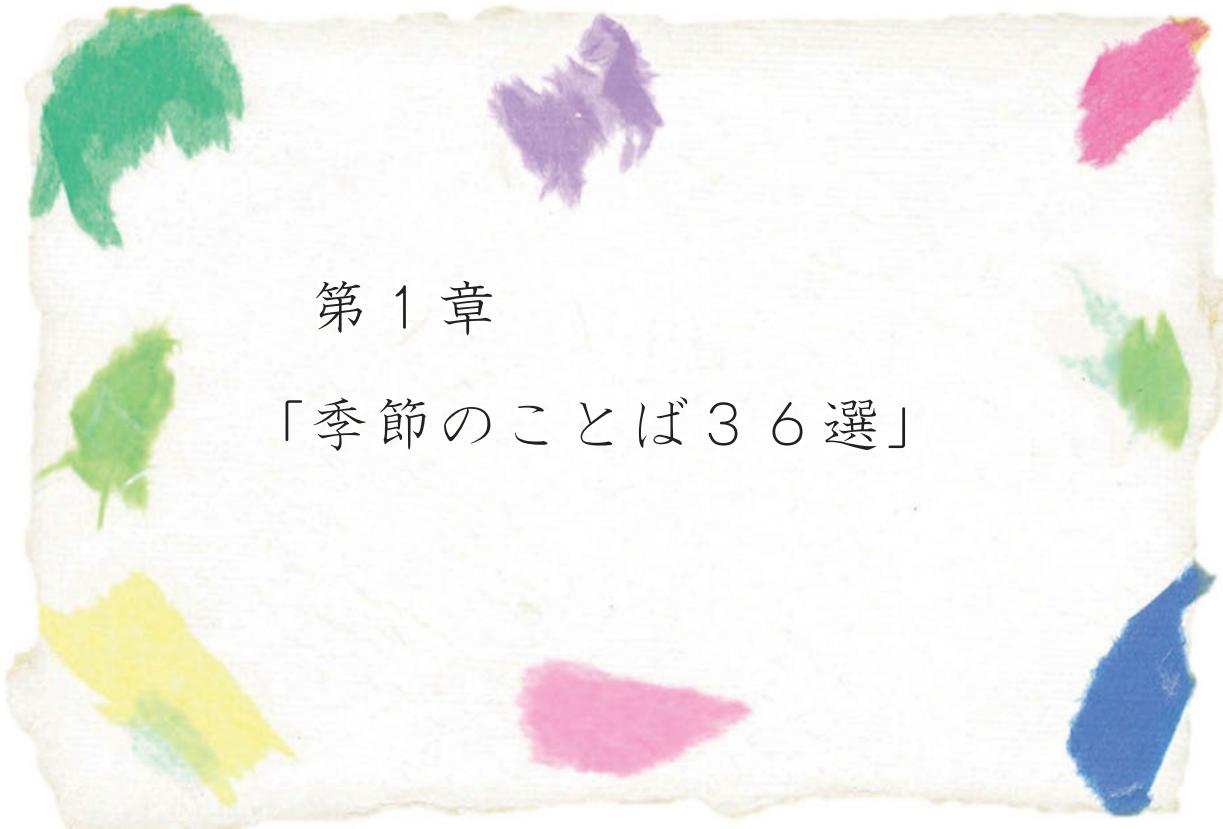
～「季節のことば36選」と「二十四節気ひとこと解説」～

もくじ

はじめに -----	1
第1章 「季節のことば36選」 -----	5
(1) 「季節のことば36選」 -----	7
(2) 「季節のことば36選」の解説 -----	8
(3) 「二十四節気ひとこと解説」 -----	10
(4) 季節のことば選考委員の紹介 -----	12
(5) 季節のことば36選の選考を終えて -----	14

第2章 “日本版二十四節氣”なるもの	-----19
(1) 旧暦と二十四節氣 -----	21
(2) 新しい季節の暦への思い -----	24
(3) “日本版二十四節氣”への反論 -----	26
(4) シンポジウム「季節が薫るひととき」開催 -----	29
第3章 “あなたが感じる季節のことば”	-----31
(1) 現代の季節感に向き合う -----	33
(2) 公開イベント「季節のことば、今昔物語。」開催 -----	40
(3) 「あなたが感じる季節のことば」募集 -----	43
(4) 選考委員会での議論 -----	51
(5) 防災カレンダー 過去の重大自然災害37事例 -----	65
第4章 「季節のことば36選」～新しい思い出の書きへ～	67
(1) 天気予報の解説での紹介例 -----	69
(2) 学校などでの利用例 -----	72
編集後記・参考文献	-----80
資料編 ～もっと楽しもう“季節のことば”～	-----81
卷末資料1 「季節のことば36選」の詳しい解説	
卷末資料2 シンポジウム「季節が薫るひととき」の実況中継	
卷末資料3 公開イベント「季節のことば、今昔物語。」の実況中継	
卷末資料4 応募された「あなたが感じる季節のことば」の紹介	
卷末資料5 雑誌等に掲載された「日本版二十四節氣」「新しい季節のことば」に対する議論	
卷末資料6 平成23年2月～平成25年10月の動き	
さくいん	-----247





第1章

「季節のことば36選」

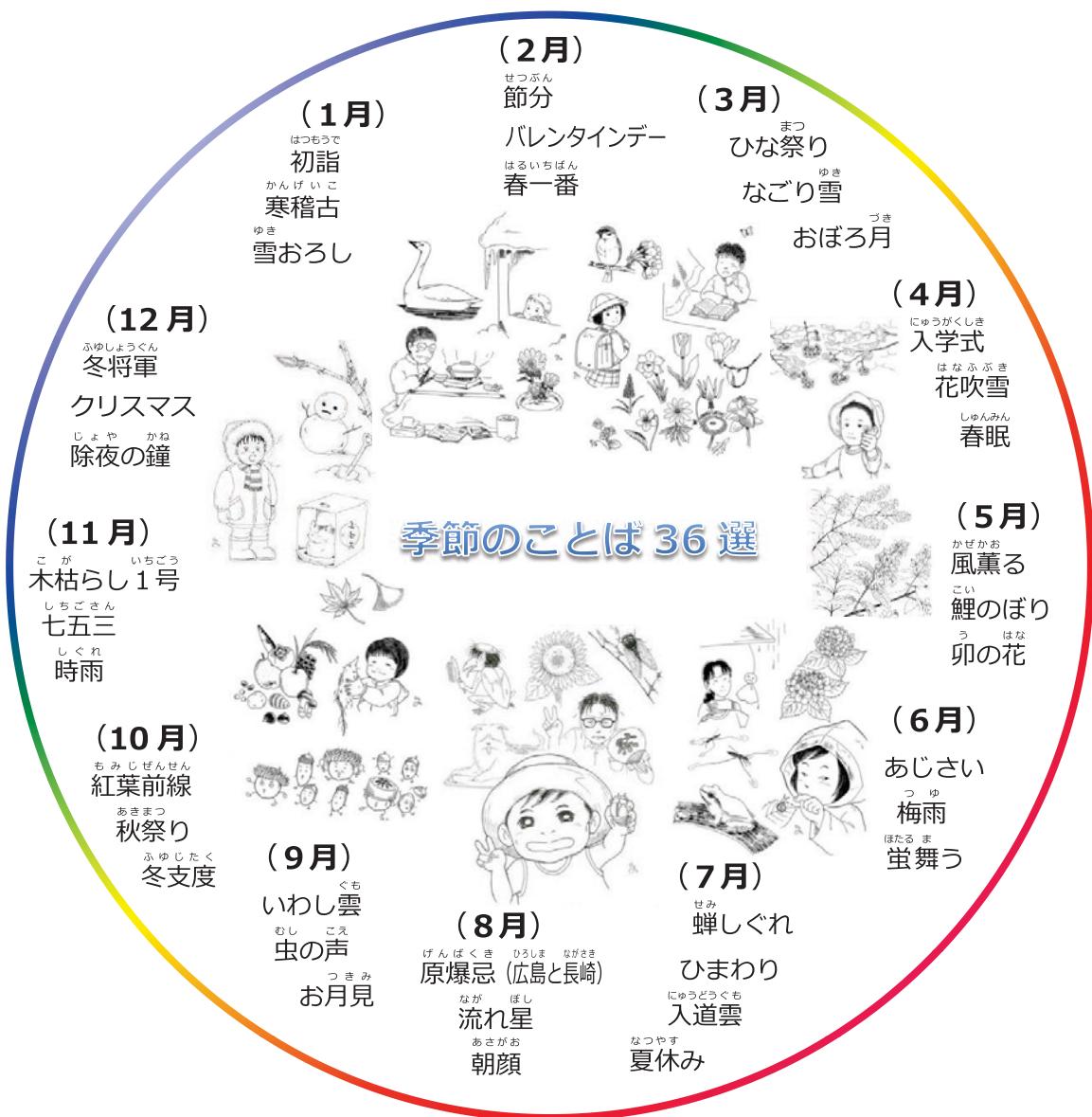
「季節のことば36選」は、“現代の季節感に合うことば”を一般公募した結果をもとにして平成25年3月に季節のことば選考委員会が選んだものです。

あわせて、選考委員会では古くから伝わる「二十四節気」を簡単に理解できる「二十四節気ひとこと解説」を作成しています。

第1章では、実際に選ばれた「季節のことば36選」を紹介しています。「季節のことば36選」の簡単な解説に加え、「二十四節気ひとこと解説」との対比で、それぞれの季節感の違いなどを味わうことができます。

(1) 「季節のことば36選」

「季節のことば36選」は、平成25年の春に季節の先取り感を意識しつつ、一般公募で人気のあったことばを取り入れて選ばれました。ひと月あたり3つのことばを選び「36選」としましたが、実際には、7月は4つのことばが選ばれて全部で37個です。



注：「流れ星」はペルセウス座流星群（8月中旬）
が見られることから選ばれています。

(2) 「季節のことば36選」の解説

「季節のことば36選」は、年中行事に関することば、気象に関することば、動植物に関することば、季節の心情や生活に関することばなどで構成されています。これらのことばのつながりが、一年をめぐる情景や人の記憶につながり、次に訪れる季節への期待や思いを感じさせてくれます。

◇季節のことば36選

1月	初詣(はつもうで)、寒稽古(かんげいご)、雪(ゆき)おろし
2月	節分(せつぶん)、バレンタインデー、春一番(はるいちばん)
3月	ひな祭(まつ)り、なごり雪(ゆき)、おぼろ月(づき)
4月	入学式(にゅうがくしき)、花吹雪(はなふぶき)、春眠(しゅんみん)
5月	風薫(かぜかお)る、鯉(こい)のぼり、卯(う)の花(はな)
6月	あじさい、梅雨(つゆ)、蛍(ほたる)舞(ま)う
7月	蝉(せみ)しぐれ、ひまわり、入道(にゅうどう)雲(ぐも)、夏休(なつやす)み
8月	原爆忌(げんぱくき) (広島と長崎)、流(なが)れ星(ぼし)、朝顔(あさがお)
9月	いわし雲(ぐも)、虫(むし)の声(こゑ)、お月見(つきみ)
10月	紅葉(もみじ)前線(ぜんせん)、秋祭(あきまつ)り、冬支度(ふゆじたく)
11月	木枯(こが)らし1号(いちごう)、七五三(しちごさん)、時雨(しぐれ)
12月	冬将軍(ふゆしょうぐん)、クリスマス、除夜(じょや)の鐘(かね)

年中行事のことば（黒）、気象や月星のことば（青）

動植物のことば（みどり）、季節の心情や生活のことば（ピンク）

なお、「季節のことば36選」の詳しい選定の経緯等は第3章（4）～（5）で紹介しています。

「季節のことば36選」の簡単な解説はつぎのとおりです。

詳細な解説は資料編「卷末資料1」にあります。

1月	初詣 寒稽古 雪おろし	一年の幸せを祈願。 寒中に行う武道や芸道の稽古。 屋根に積もった雪の除雪。
2月	節分 バレンタインデー 春一番	立春前日のこと。鬼追いの豆まき行事。 主に女性がチョコレートで愛を告白。 立春すぎに吹く、暖かい南よりの強い風。
3月	ひな祭り なごり雪 おぼろ月	ひな人形を飾り女子の健やかな成長を祈願。 寒の戻り、冬のなごりを感じる雪。 春のかすみがかかった月。
4月	入学式 花吹雪 春眠	入学祝いの式典 強風で桜の花が一気に舞う様子。 「春眠暁を覚えず」 うららかな春の様子。
5月	風薰る 鯉のぼり 卯の花	初夏を感じるさわやかな風。 鯉のぼりを立てて男子の健やかな成長を祈願。 梅雨のはしりの雨の頃に咲いている白い花。
6月	あじさい 梅雨 螢舞う	梅雨の時期をいろどる花。 本格的な夏の前のくもりや雨の日が多い期間。 ホタルが飛び交う美しい情景。
7月	蝉しぐれ ひまわり 入道雲 夏休み	多くの蝉の声が空から降りそそぐような情景。 太陽にちなんだ名前がぴったりの夏の花。 もくもくと空高くまでそびえ立つ巨大な雷雲。 長い夏の休み。
8月	原爆忌(広島と長崎) 流れ星 朝顔	1945年8月に投下された原子爆弾の犠牲者を弔う日。 8月中旬頃のペルセウス座流星群では多くの流れ星を観察。 つるがのびてラッパのかたちの花が咲く夏の風物詩。
9月	いわし雲 虫の声 お月見	小さな雲がいわしの群れのように広がる秋を告げる雲。 秋の夜長に聞こえてくる虫たちの鳴き声。 だんご、スキ、サトイモ等を供えて観月。
10月	紅葉(もみじ)前線 秋祭り 冬支度	高い山から、北国から順にもみじが色づき南下。 秋に行う収穫祭。 冬の生活にむけた準備。雪吊り、冬物の準備など。
11月	木枯らし1号 七五三 時雨	晩秋、冬型の気圧配置となり最初に吹く木枯らし。 7歳、5歳、3歳の子供の成長を祝う行事。 晩秋のにわか雨。季節風の雲による降雨や降雪。
12月	冬将军 クリスマス 除夜の鐘	強い寒波が襲来する際、報道で使用。主に初冬から正月。 イルミネーションやケーキ、サンタクロースのプレゼントなどが定着。 大晦日の深夜に寺院でつく108つの鐘。

(3) 「二十四節氣ひとつ解説」

「二十四節気」は、一年を二十四にわけて作られたもので、旧暦（太陰暦）を利用していた頃から季節暦（きせつごよみ、太陽暦）として古くから親しまれてきた“季節のことば”です。

“二十四節気の春”は二月上旬の立春からはじまり、ひと月に二節気ずすみながら、翌年一月下旬の大寒までめぐります。これらのことばは、特に若い人になじみがない人が多く、わかりにくくいという声もあり、ひとこと解説が作られました。

二十四節気ひとこと解説	①立春 春の生まれるころ	②雨水 春の雨が降りはじめる	③啓蟄 地中の虫が目覚める	④春分 春のなかば
⑤清明 穀雨	麗か（うららか） 穀物が芽吹くころ	穀物が芽吹くころ	穀物が芽吹くころ	穀物が芽吹くころ
⑥立夏 夏の生まれるころ	夏の生まれるころ	若葉の輝くころ	麦の熟れるころ	麦の熟れるころ
⑦小満 暑がいちばん長いころ	暑がいちばん長いころ	若葉の輝くころ	麦の熟れるころ	麦の熟れるころ
⑧芒種 暑さが厳しくなる	暑さが厳しくなる	麦の熟れるころ	麦の熟れるころ	麦の熟れるころ
⑨夏至 昼がいちばん長いころ	昼がいちばん長いころ	麦の熟れるころ	麦の熟れるころ	麦の熟れるころ
⑩小暑 暑さが厳しくなる	暑さが厳しくなる	麦の熟れるころ	麦の熟れるころ	麦の熟れるころ
⑪大暑 暑さ極まるころ	暑さ極まるころ	麦の熟れるころ	麦の熟れるころ	麦の熟れるころ
⑫立秋 秋の生まれるころ	秋の生まれるころ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ
⑬秋分 秋のなかば	秋のなかば	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ
⑭白露 肌寒さを覚える	肌寒さを覚える	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ
⑮霜降 早霜（はやじも）	早霜（はやじも）	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ
⑯小雪 雪が降る	雪が降る	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ
⑰大雪 冬の生まれるころ	冬の生まれるころ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ
⑱冬至 寒さが厳しくなる	寒さが厳しくなる	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ
⑲小寒 寒さが極まるころ	寒さが極まるころ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ
⑳大寒 冬の生まれるころ	冬の生まれるころ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ	露が白々と結ぶ

この「二十四節気のひとこと解説」は、平成25年3月に「季節のことば選考委員会」によりつくられました。

〔参考〕二十四節氣の頃

立春	(りっしゅん)	2月4日頃	雨水	(うすい)	2月19日頃
啓蟄	(けいちつ)	3月6日頃	春分	(しゅんぶん)	3月21日頃
清明	(せいめい)	4月5日頃	穀雨	(こくう)	4月20日頃
立夏	(りっか)	5月5日頃	小満	(しょうまん)	5月21日頃
芒種	(ぼうしゅ)	6月6日頃	夏至	(げし)	6月21日頃
小暑	(しょうしょ)	7月7日頃	大暑	(たいしょ)	7月23日頃
立秋	(りっしゅう)	8月7日頃	処暑	(しょしょ)	8月23日頃
白露	(はくろ)	9月8日頃	秋分	(しゅうぶん)	9月23日頃
寒露	(かんろ)	10月8日頃	霜降	(そうこう)	10月23日頃
立冬	(りっとう)	11月7日頃	小雪	(しょうせつ)	11月22日頃
大雪	(たいせつ)	12月7日頃	冬至	(とうじ)	12月22日頃
小寒	(しょうかん)	1月5日頃	大寒	(だいかん)	1月20日頃

注：日付は平成 26 年(2014 年) 国立天文台による。

「季節のことば36選」と「二十四節気」を比較すると、季節のとらえ方やことばのもつ意味合いの違いを感じとることができます。

冬		秋				夏			春			冬		気象学							
12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月	3月	2月	1月	月									
除夜の鐘 クリスマス	時雨 冬将軍	七五三 木枯らし1号	冬支度 秋祭り	紅葉(もみじ)前線 虫の声	お月見 いわし雲	朝顔 滝れ里 原爆忌(広島と長崎)	蝶々舞 ひまわり 夏休み 入道雲	蜂の巣 ひまわり 夏休み 入道雲	卵の花 蝶の巣 春眠	花吹雪 入学式	おぼろ月 ひな祭り	春一番 バレンタインデー 節分	雪おろし 寒暖古 初詣	季節のことば36選	二十四節気　ひとこと解説						
冬		秋				夏			春			冬		哲学・文学							
冬至 雪が降る	大雪 雪がいちばん短いころ	小雪 冬の生まれるころ	立冬 冬の生まれるころ	霜降 肌寒さを覚える	寒露 早霜(はやじき)	白露 秋のなかば	処暑 露が白々と結ぶ	立秋 露が白々が衰える	大暑 秋の生まれるころ	小暑 暑え極まるころ	芒種 暑えが厳しくなる	立夏 暑えが厳しくなる	小満 暑えが厳しくなる	穀雨 麦の熟れるころ	清明 若葉の輝くころ	春分 穀物が芽吹くころ	春分 春のなかば	立春 春の生まれるころ	雨水 春の雨が降りはじめる	大寒 寒さが厳しくなる	小寒 寒さが極まるころ
12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月	3月	2月	1月	月									
冬	秋				夏			春			冬		気象学								

*1 *2 関東地方の統計値を参考 *3 ベルセウス流星群の極大(8月 12~13日)

(3) 季節のことば選考委員の紹介

季節のことば選考委員は、暦・ことば・気象・天文に関わる各分野の専門家8名にお願いいたしました。そして、“あなたが感じる季節のことば”公募企画から「季節のことば36選」選定までをご担当いただきました。



選考委員長 新田 尚

日本の豊かな四季の移ろいが、日本人の季節の進行に対する鋭い感性を育てたといえますが、二十四節気(七十二候)はその象徴といえるでしょう。中国起源の言葉遣いも必ずしも一般になじみ深いとはいえないこの二十四節気が、現在も広く日本の社会に浸透していることは、それを物語っていると思います。その一方で、若い人を中心に二十四節気の言葉がピンとこないともいわれています。

過日、私は神田の某大書店の売場案内の若い女性に「二十四節気関連書物の売場」を尋ねたところ、「二十四節気って何ですか」と問われました。気象協会のこの度の提案が、こうした事情を改善し、我々の感性に一層みがきをかける上で役立つことを願っています。



安達 功
時事通信社
編集局長



石井 和子
フリーANAウンサー
日本気象予報士会顧問



岡田 芳朗
暦の会会长



片山 真人
国立天文台天文情報
センター暦計算室長



梶原 しげる
フリーANAウンサー
専攻:応用心理学



長谷川 権
俳人・朝日俳壇選者
きごさい代表



山口 伸美
明治大学国際
日本学部教授

◆委員プロフィール詳細◆

新田 尚 氏(委員長)

1955年、東京大学理学部地球物理学科卒業。1965年、理学博士(東京大学)。1990年、気象庁予報部長。1992年、気象庁長官。1993年から2000年までは東海大学教養学部特任教授。専攻:天気予報技術(数値予報論)、大気循環論
著書:「大気循環論」(東京堂出版)、「新気象読本」(東京堂出版)、「気象情報の読み方・使い方」(オーム社)、「異常気象の謎」(大日本図書)など。(共著)「気象学百年史」(東京堂出版)、「数値予報と現代気象学」(東京堂出版)。(監修)「身近な気象の事典」(東京堂出版)。受賞:日本気象協会岡田賞(1976)、日本気象学会藤原賞(1982)

安達 功 氏

1978年4月、時事通信社入社
社会部記者、パリ特派員、社会部長、編集局次長などを経て2011年10月、編集局長。

石井 和子 氏

学習院大学文学部仏文科卒業。TBSアナウンサーを経て、現在はフリーアナウンサー。気象予報士、学術博士、日本気象予報士会顧問、桜美林大学講師、白山朗読の会主宰。
著書:『平安の気象予報士 紫式部』(講談社プラスα新書)

岡田 芳朗 氏

1930年、東京市日本橋区生まれ。1953年、早稲田大学教育学部卒業。1956年、同大学大学院修了。女子美術大学教授、文化女子大学教授を経て、現在、女子美術大学名誉教授、暦の会会長、日本カレンダー暦文化振興協会顧問。
専攻:日本古代史、暦文化史
著書:「日本の暦」(木耳社、新人物往来社)、「アジアの暦」「明治改暦」(東京堂出版)、「明治改暦」(大修館書店)、「旧暦読本」(創元社)、「現代こよみ読み解き事典」(柏書房)他多数。

片山 真人 氏

1994年、東京大学教養学部基礎科学科第一卒業。1996年、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了。1996年、海上保安庁水路部航法測地課。2005年、国立天文台天文情報センター暦計算室、2007年、同暦計算室長。専攻:天体力学
著書:「(共著)「現代の天文学13 天体の位置と運動」(日本評論社)、「理科年表シリーズ よくわかる宇宙と地球のすがた」(国立天文台編 丸善)、「太陽系大地图」(小学館)。(監修)「グレゴリオの迷宮へ暦の科学へ」(サイエンス チャンネル)など。

梶原 しげる 氏

1950年7月26日生まれ。神奈川県茅ヶ崎出身。早稲田大学法学部を経てラジオ局文化放送にアナウンサーとして入社。1992年からフリーへ。49歳で東京成徳大学大学院心理学研究科に進学し、心理学修士号取得。他に認定カウンセラー、健康心理士、シニア産業カウンセラーの資格を持つ。その資格「産業カウンセラー」がNHK Eテレ「資格☆はばたく」10月放送(2011)で取り上げられて、カウンセラー兼講師役として出演。また、(社)日本青少年育成協会内に自身のカウンセリングルームを開設し、不定期にクライアントの相談に応じている。2006から東京成徳大学応用心理学部客員教授に就任。書籍では2003年秋に出版した新潮新書「口のさき方」が15万部を越え、2006年度からの中学の国語教科書「伝え合う言葉 中学国語1」(教育出版)に採用される。2009年より、五木寛之氏、立松和平氏らと日本語検定審議委員に選出され就任。日本語検定評価委員も兼務。専攻:応用心理学

長谷川 権 氏

熊本県生まれ。東京大学法学院卒業。読売新聞記者を経て、俳句に専念。朝日俳壇選者、「季語と歳時記の会」(きごさい)代表、東海大学文学部文芸創作学科特任教授。1990年、『俳句の宇宙』でサントリー学芸賞、2003年、第五句集『虚空』で読売文学賞受賞。
著書:『俳句の生活』(中公新書)、『古池に蛙は飛び込んだか』(花神社)、『奥の細道』をよむ』(ちくま新書)、『決定版一億人の俳句入門』(講談社現代新書)、『和の思想』(中公新書)、『句会入門』(講談社現代新書)、『子規の宇宙』(角川選書)、『震災歌集』(中央公論新社)。『長谷川権全句集』(花神社)、『新年』(角川書店)、『富士』(ふらんす堂)、『鶯』(角川学芸出版)。

山口 伸美 氏

1969年、東京大学大学院修士課程修了。文学博士。現在、明治大学国際日本学部教授。
専攻:日本語学(特に、日本語史、擬音語・擬態語研究)、日本古典文学(特に、平安文学)
著書:「平安文学の文体の研究」(明治書院)、「ちんちん千鳥の鳴く声」(講談社学術文庫)、「犬は「びよ」と鳴いていた」(光文社新書)、「日本語の歴史」(岩波新書)、「若者言葉に耳をすませば」(講談社)、「暮らしのことば 擬音・擬態語辞典」(講談社)、「すらすら読める今昔物語集」(講談社)、「すらすら読める枕草子」(講談社)、「中国の蝉は何と鳴く?」(日経BP社)、「新・にはんご紀行」(日経BP社)など、言葉や古典文学に関するエッセイも多い。
受賞:日本古典文学賞・金田一京助博士記念賞・日本エッセイストクラブ賞。2008年秋 日本語学の研究で紫綬褒章を受けた。
メディア:NHKテレビ「爆問学問」「視点・論点」、日本テレビ「世界一受けたい授業」、TBSテレビ「教科書に載せたい!」などで活躍。

(5) 「季節のことば36選」の選考を終えて

平成24（2012）年8月～12月に「あなたが感じる季節のことば」を一般公募した結果、寒暖に関するつぶやきから、行事、服装など身近な生活のこと、食べ物、植物、動物、地名・人物名まで5000件（各季節1200件以上）を超える応募がありました。また、ことばの数（同じことばを1つとして集計）は1588件（各季節400件程度）でした。

新田尚氏を委員長とする8名の選考委員が、応募結果をとりまとめたデータの内容を検討して選定案を作成した上で選考委員会を2回開催し、「季節のことば36選」が選定されました。前述のように、選考委員会では、「二十四節気ひとこと解説」も作成しました。

ここでは、「季節のことば36選」選考直後（平成25年3月）の選考委員のコメントを紹介します。

「マイ季節のことば」を選ぼう

新田 尚

応募作品の多くの「季節のことば」から決められた数のことばを絞り出す作業は大変でしたが、本当に日本人は季節に敏感だし、美しいことばで季節感として表現する、すぐれた感性をもっている人が多いと、あらためて感じました。

近年、旧暦への関心が高まっていますが、同時に「自分にとっての季節のことば」を選び出すことで、少し大げさですが、新しい文化を自分なりに創り出す希望を持ち続けたいと思います。このたび選に漏れた方々も、新しい文化創造をめざして「マイ季節のことば」への感性をこれからも磨いて下さい。その場合、必ず二十四節気などをよく見直して、そのコンパクトな表現に込められた思いを味わい、続いて自分独自の季節感覚にマッチした「季節のことば」を広く収集したり工夫したりしてみられてはどうでしょうか。



季節のことばを選んで

安達 功

昔に比べ季節感が薄れたと言われます。しかし、寄せられた多くの「季節のことば」を見ていくと、現代の日本人も生活の中の小さな変化に季節を感じ、そこに記憶をからませて歳を重ねているということをあらためて感じました。

たとえば、「なごり雪」や「螢舞う」などのことばを選んだ方々は、いま降っている雪や目の前で光っている螢という事象を超えて、遠くなつた「あの日」の記憶と結びついた情景を思い浮かべているのでしょうか。いくつかのことばが、どこかロマンチックな感じを帯びているのはそのためなのだと思います。

今回まとめられた「季節のことば36選」が伝統的な二十四節気とともに、四季を持つ日本人の生活にちょっと懐かしさを含んだ色合いを添えることができたらと思います。

片山@国立天文台暦計算室です。

片山 真人

最初はどうなることかと思っておりましたが、いざふたを開けてみると、現代日本人の季節感もじつに多様であることがわかりました。今回選考されたもの以外にも、動物、植物、食べ物、スポーツ、最近の時事ネタ、古きよき時代ネタなど、いろいろなテーマで季節を振り返ることが出来そうです。

#うたた猫などは、情景を思い浮かべやすく、面白い表現だと思いました。

なお、オリオン座など星座を挙げた方もおられましたが、星座の多くは時間次第でほぼ1年中見られますので、星座で季節を表現するにはいつ、どの方向に見えるかといった情報も必要です。たとえば、ふたご座の和名「かどへい(門杭)」は旧正月の夜明け頃、ふたご座が西の空に縦になって沈んでいく様が正月の門飾りに似ていることに由来しますし、アーケトゥルスが麦星・麦熟れ星・麦刈り星などと呼ばれるのは、麦が熟れる5月下旬～6月上旬頃に一晩中眺めることができる星だからです。



異常気象は心配ですが

石井 和子

どれかの季節に生まれて、(季節の)うつり、たけなわ、うつり、たけなわ…と何度もぐり返し、いずれはどれかの季節で亡くなる。
平成 24 年の季節感を残しておきたくて、日本人の生活、季節のめぐりを大切にして選びました。これからも季節のめぐりを気象予報士の目線で見守ります。

わたしは梶原委員！

梶原しげる

池袋のイベントで金田一先生がおっしゃっていたく移ろう季節を先取りする事で、現実の暑さや寒さ、花粉症、じめじめなど、現下の季節的困難を克服しようとする日本人の知恵>というご趣旨のお言葉に勝手に共感しつつ、言葉選びをいたしました。加えて、言葉から、多くの方が「光景が様々に見えて来る」という言葉の持つ「ビジュアル性」も重視いたしました。

注:池袋のイベント:公開イベント「季節のことば、今昔物語。」 2012年8月31日(金)開催

第一部「ことばと暦の歴史」

司会 梶原しげる氏(フリー・アナウンサー) 望月圭子氏(気象予報士)

出演 石井和子氏(元TBSアナウンサー 日本気象予報士会顧問)

岡田芳朗氏(暦の会会长)

片山真人氏(国立天文台天文情報センター暦計算室長)

三遊亭右京氏(落語家)

第二部「お天気キャスターのことばの使い方」

ゲスト 金田一秀穂氏(杏林大学外国語学部教授)

お天気キャスター出演 天達武史氏 南 利幸氏 福富里香氏

関連イベント:シンポジウム「季節が薫るひととき」 2012年2月10日(金)開催

日本の気候や日本人の季節感などについての座談会

コーディネーター:梶原しげる氏(フリー・アナウンサー)

出演 岡田芳朗氏(暦の会会长)

長谷川禪氏(俳人・朝日俳壇選者・きこさい代表)

前田修平氏(気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課 予報官)



「二十四節氣(にじゅうせつき)」をふたたび

岡田 芳朗

“今日の日本人の季節感にふさわしい新しい二十四節氣を考えてみよう”という趣旨の日本気象協会の提案は、社会に大きな反響を巻き起しました。特に暦や季語に関心をもつ人達は強い衝撃を受け、早速反発する人もありました。

しかし、東洋文化の精華であり、日本の伝統や文学の根源として、天与の存在のように考えられてきた二十四節氣について、改めて現代の視点から考察し直す機会を生むこととなりました。

その結果、日本の季節を表すのに、ふさわしい言葉を一般から募って「季節のことば36選」となり、やや難解な古代漢語を易しい日本語で表した「二十四節氣ひとこと解説」としてまとめました。

これは、これから日本人が季節を考える時に大切な拠所となるものと思われます。

日本人の季節感の結晶

長谷川 権

「季節のことば36選」に「なごり雪」が入りました。春を迎えてから最後に降る雪であり、立春(二月四日ころ)をすぎて降る「春の雪」のひとつです。

そこで思い出すことがあります。欧米の留学生たちと句会をしたときのこと、「春の雪」を題に出したら困った顔をしています。わけをきくと「雪が降らなくなつてからが春」「だから春の雪なんてありません」というのです。

その答えをきいて、日本では昔から立春から春であり、それ以降に降る雪は春の雪であると説明したのですが、納得がゆかないようでした。彼らの文化では暖かくなつてからが春なのです。

そのとき気づいたことは日本人は季節に敏感であり、生活も文化も繊細な季節感の上に成り立っているのだということでした。

立春は二十四節氣のひとつですが、寒さ厳しい二月のはじめです。昔の日本人は今の日本人と同様「なぜまだ寒いのに春なんだ?」と不思議に思ったはずです。そして寒さの中に春のいぶきを見つけようとした。

秋のはじめの立秋も暑いさなかの八月はじめにめぐってきます。そこで暑さのなかに秋の気配を感じとろうとした。この次の季節の兆しを探る気持ちこそが日本人の季節感をはぐくんだのではないでしょうか。

もし欧米の人々のように暑いときは夏、涼しくなつてからが秋、寒いときは冬、暖かくなつてからが春と思っていたら、繊細な季節感など育たなかっただろうと思います。

この繊細な季節感の結晶ともいるべき言葉が日本にはたくさんあります。「なごり雪」がそうであるように、それらはみな春や秋の訪れを待ち、過ぎ去った季節のなごりを惜しみというふうに、みな揺らぎ、たゆたう言葉です。海外にはなかなか例のないことです。これらの言葉は世界遺産になる条件も十分そなえています。今回、日本気象協会が選んだ「季節のことば」はそのほんの一部です。

季節のことば36選 ～あじさい～

明治大学教授・エッセイスト 山口 仲美

季節のことば36選を選び終わってほっとしています。合議で選ばれたこれらのことばをじっと眺めていくと、日本の微妙な季節の推移や古来からの行事が目の前に浮かび、楽しい気分になります。どれも、思い出のつまつた言葉なのです
が、ここでは6月のことばに選ばれた「あじさい」にまつわる思い出を一つ。

「あじさい」は、在来の花ですが、地味なので私自身はさほど好きではありませんでした。でも、母親が手作りでアジサイのイメージのするワンピースを作ってくれたことがあります。濃淡のある水色と紫色からなる花模様のワンピースです。それを着て授業をすると、学生が言います。「先生、すてきだね。どこで買ったの？」
「買ったんじゃなくて、母が作ってくれたのよ。」「そうか、買えないんだあ。」あじさいに対する気持ちが変わりました。また、母が病んで歩けなくなったり、車いすに乗せて公園を散策しました。あじさいが、ワンピースさながらの色合いで咲き乱していました。「きれいだね」。母は言いました。それから二か月して母が亡くなりました。あじさいは母の好きな花だったのです。

